

Dimitris J. Kastritsis 著 *The Sons of Bayezid : Empire Building and Representation in the Ottoman Civil War of 1402-1413*

(The Ottoman Empire and its Heritage 38)

Leiden & Boston : Brill, 2007 (xxiii+250pp.+3 maps)

今 澤 浩 二

オスマン朝第4代スルタン、バヤズィト1世（位1389-1402）は急進的拡大政策を推し進め、1400年頃にはバルカンからアナトリア全域に広がる地域を支配下に収めて、あたかも「帝国」を現出させたかに見えた。しかしながら1402年7月28日、中央アジアの覇者ティムールにアンカラ近郊で一敗地に塗れ、バヤズィト自身も捕らえられて、彼の帝国は脆くも瓦解した。さらにこのあとバヤズィトの皇子たちが10年におよぶ権力闘争をくりひろげ、オスマン朝は滅亡寸前にまで追いつめられた。しかしやがてオスマン朝はこの危機を乗り越え、1453年にはコンスタンティノープルを征服し、真の帝国建設に向かうことになる。

本書『バヤズィトの息子たち —— 1402-1413年のオスマン朝内訌期における権力拡張と表象 ——』は、こうしたオスマン朝の歴史において内訌期の果たした意義を明らかにしようとするものである。2005年のハーヴァード大学学位請求論文に修正を加え、改題した上で、Brill社の“The Ottoman Empire and its Heritage”シリーズのひとつとして上梓された。

本書の構成は以下の通りである。

目次、前文、雑誌略号一覧、翻字・発音注意書、地図

序 章 アンカラの会戦とその結果

第1章 アンカラ後の政治情勢（1402年7月28日～1403年春）

第2章 アナトリア —— イーサーとメフメト・チェレビ（1403年春～1403年9月）

——

第3章 アナトリア —— エミール・スレイマンとメフメト・チェレビ（1403年3月以前～1410年6月14日） ——

第4章 ルメリ —— エミール・スレイマンとムーサー・チェレビ（1409年？～1411年2月17日） ——

第5章 ムーサー・チェレビの治世と内訌の終結（1411年2月17日～1413年7月5日）

第6章 オスマン朝内訌期の叙述作品と正当化

付録「Abdülvasi Çelebi 著 *Halîlnâme* 所収『スルタン・メフメトとムーサーの戦い、
およびムーサーの敗北』の英訳」

参考文献、索引

以下、本書の内容を紹介し、その後、評者の若干の意見を述べることにする。

まず前文では、バヤズィト 1 世の息子たちが王位争いをくりひろげた時代に関して、従来使われていた「空位時代」(the interregnum; トルコ語 *fetret devri*) という言葉を使わず、それにかえて「オスマン朝内訌」(the Ottoman civil war) と呼ぶべきであると主張される。著者によれば、「空位時代」という用語は当該時期の重要性をそこない、バヤズィト 1 世の治世とメフメト 1 世 (位 1413-21) のそれとの間の暗い幕間劇におとしめてしまう。その結果、この時期は混沌とした時代で、首尾一貫した政策や文化がなかったという印象を与えてしまうが、実際はその逆で、息子たちはそれぞれ父バヤズィトの正当な後継者たることを主張して、支配地の内外において首尾一貫した政策を実行したのだという。

序章では、オスマン朝内訌を終わらせたメフメト 1 世やその息子ムラト 2 世時代 (1421-44, 46-51) においても、デュズメ・ムスタファ (メフメトの兄弟) やシェイフ・ペドレッディン、クチュック・ムスタファ (ムラトの兄弟) らの反乱が頻発したことが述べられ、こうした反乱の多くが内訌期に深く根ざしていることが指摘される。本書の目的は、このようにオスマン朝の将来にとって重要な意味を有する内訌期の諸事件について信頼性の高い叙述を行ない、それを通じて生じた主要なテーマや問題を究明することにある。

続いて、内訌期における内外情勢が概観されたあと、本書で利用される諸史料の解題が行なわれる。史料の取り扱い方については、オスマン朝初期に関する年代記の価値を全否定する Colin Imber の考え方を退け、Paul Wittek や Halil İnalcık、とくに Cemal Kafadar が提起するように [Kafadar 1995]、史料記述の言外の意図を読み取ることで、正確な史実だけでなく、その作品が生み出された社会の状況に対する理解も得られるとする。

本書では、オスマン語・ギリシア語・イタリア語等さまざまな言語で記された史料が駆使されるが、その中でも特に、内訌終結後まもなくメフメト 1 世の宮廷で著されたと思われる無名氏のオスマン朝年代記 (著者はこれを *Aḥvāl-i Sultān Meḥemmed* と名づけている。以下、本書の略称に従い *Aḥval* という) が主要な史料として利用されている。この書は、アンカラの会戦直後から弟ムーサーに対する最終的な勝利 (1413 年 7 月 5 日) に至るまでのメフメトの事績を平易なオスマン語で記しており、著者によると、散文体のオスマン朝年代記としては最古のもののひとつである。ただし本来の独立した作品としては現存せず、15 世紀末に成立したオックスフォード大学所蔵の無名氏のオスマン朝年代記写本やネシュリーの『世界の鏡』の本文に取り込まれる形で伝わっている [Oxford Anonymous: 399-433; Neşrî-Mz: 98-141; Neşrî-Mn: 151-210; Neşrî-Ank: 366-516]。著者は、この年代記がメフメト 1 世のために書かれたものであるから記述の解釈には注意を要するとしながらも、内訌

期の同時代史料として高い価値を認めている¹⁾。

第1章では、アンカラ会戦後の政治情勢が検討される。アンカラの戦場からはバヤズィト1世の皇子のうちエミール・スレイマン、イーサー、メフメトが逃げのび、内訌期序盤ではこの三者が各地に拠って対抗していくことになる。当時、最年長であったエミール・スレイマンがバヤズィト1世の後継者と目され、そのため大宰相チャンダルル・アリー・パシヤをはじめとするバヤズィトの側近たちによって戦場から救い出され、ルメリに渡った。その際、イーサーも同行したという。1403年、スレイマンはガリポリで、ビザンツ帝国をはじめとするバルカン・西欧諸国と条約を結んで領土に関して大幅な譲歩を示し、これらの諸国に対して宥和政策を採ることになった。

アンカラの会戦後ティムールは、バヤズィト1世によって併合されていたアナトリアの侯国 (Beylik) の多くを復活させ、オスマン朝に対しては領土を大幅に削減した上で、互いに対立する皇子たちの間で分割するという政策を採った。オスマン朝に残された領地は、スレイマンの支配するルメリと、アナトリアでは首都ブルサのあるビテュニア地方、およびアマスィヤ、トカトを中心としたルーム地方であった。当時のイタリア語文書によると、当初ティムールはブルサの支配権をバヤズィト1世の兄弟サヴジュの息子に与えた²⁾。しかし1402年11月までには、アナトリアにもどっていたイーサーがこの人物を追放し、かわってブルサを支配するに至った。

一方メフメトは、父親の時代から知事を務めていたルーム地方へもどり、その地域のテュルクメン諸部族を平定していった。それを知ったティムールはメフメトに出頭を命じ (1403年1~2月)、メフメトもそれに応じてアナトリア西方に向かったが、その途上、多くの敵に遭遇したためティムールの意図を疑い、ティムール訪問を思いとどまることになった。

第2章では、1403年春、ブルサを支配していたイーサーと、ルーム地方から西進してきたメフメトがアナトリア支配をめぐる争い、同年秋頃にイーサーが滅ぶまでの経緯が検討される。

1403年3月9日、バヤズィトが虜囚のままアクシェヒルで没すると、ティムールはバヤズィトの遺体をその地に置き、同じく捕虜となっていた皇子ムーサーとともに、ゲルミヤン侯ヤクブ・ベイに託した。著者によれば、この頃メフメトはゲルミヤン侯に「宣誓書」 (*sevğendnâme*) を送り、ゲルミヤン侯も、西進してきたメフメトを訪ねて、両者の間で同盟が結ばれたという。その結果メフメトはゲルミヤンの援軍を得て、ブルサ近郊のウルバード Ulubad でイーサーを撃破し、ブルサで即位宣言することに成功した。またゲルミヤン侯

1) 著者は本書に続いて、この史料の校訂本も出版している [Kastritsis 2007]。

2) サヴジュは父ムラト1世の治世にビザンツ皇子アンドロニコスと共謀してクーデタを起こしたため、失明させられて王位継承権を失った。著者によると、サヴジュの息子もこの事件に連座し、このためムラトとその後継者バヤズィト1世を恨み、ティムールのもとに避難していたという [p. 48]。

からバヤズイトの遺体とムーサーを引き取り、バヤズイトをブルサに埋葬した。こうしてメフメトはバヤズイトの正当な後継者たることを印象づけたのだという。

このあと著者は、コンスタンティノーブルに逃れたイーサーが、同年5月までにアナトリアに舞い戻り、メフメトとのさらなる3度の戦いの末、9月頃に破滅する過程とアナトリアの政治情勢を検討している。著者によれば、ブルサの支配をめぐるメフメトとイーサーの争いは内訌期の第1段階であり、それはメフメトの勝利で終わった。また、ゲルミヤンやカラマン、ジャンダルなどの侯国もこの抗争に介入し、状況に応じてイーサーやメフメトと同盟を結ぶことによって、再びバヤズイト1世のようなアナトリア全域を統合するオスマン朝君主が現われるのを防ごうとしたことも指摘されている。

第3章（章題にある「1403年3月以前」は「1404年3月以前」の誤りであろう）では、イーサー滅亡後まもなく（遅くとも1404年3月までに）エミール・スレイマンがアナトリアに渡り、メフメトと抗争していく1410年6月までの情勢が検討される。スレイマンの進軍を知ったメフメトはブルサを捨て、アンカラに退いた。しかしそこでも踏みとどまることができず、ルーム地方に立て籠もることになった。スレイマンはメフメトを追ってルーム地方に入ったが、一城も取れずブルサに帰還した。これ以降、両者の抗争は一進一退をくり返し、数年間にわたる（1404～1410）膠着状態に陥ったという。

この時期に関する *Ahval* の記述では、スレイマンがハمامで飲酒にふけったり、彼の宰相アリー・パシャがメフメトの攻撃をかわすために策謀を練ったりする場面がしばしば取り上げられる。著者によれば、これは額面どおり受け取るのではなく、オスマン朝の中央集権化を図るスレイマンとその支持者に対するガーズイーなど特定の社会集団の反感が反映されていると考えるべきであるという。またスレイマンがブルサ東方のサカリヤ河畔で検地を行なわせたという記述も見られるが、これも中央集権化の一手段であり、反対勢力にとっては嫌悪を覚えるものである。つまり、*Ahval* の著者はこうしたことを記載することによってスレイマンを、中央集権化を図る人物として貶めようとしたのだという。これは、*Ahval* の記述の背後の意図を探った重要な指摘であろう。

次いで、スレイマンがアナトリアに滞在していた1403/04～1410年のルメリの状況に考察が加えられ、スレイマンがキリスト教諸国に対して宥和政策をとり続けたこと、しかしルメリの実質的な管理は辺境将軍のウジ・ベイたちに委ねられていたことが指摘される。そのあと、アナトリアにおける膠着状態を打開するものとして、メフメトのもとにいた弟ムーサーが1409年頃ルメリに渡るまでの経緯が検討されている。

第4章では、ルメリをめぐるムーサーとスレイマンの抗争が考察される。著者はまず、ムーサーがルメリに渡った当時の政治情勢を分析し、スレイマンの宥和政策に不満を抱いていたアクンジュ（辺境での略奪戦に従事する不正規軍）やスイパーヒー、さらにはウジ・ベイたちがこぞってムーサーを支持したことを明らかにする。

1409年9月以降、ムーサーはこうした支援を受けて黒海沿岸のビザンツ都市メセンブリ

ア Mesembria を攻撃し、その後エディルネ入城を果たした。これを知ったスレイマンがルメリに渡り、コンスタンティノープル城下のエユップ (Kosmidion ; 1410 年 6 月 15 日) とエディルネ (同年 7 月 11 日) でムーサーを 2 度破ったが、最終的にはムーサーがスレイマンを倒して (1411 年 2 月 17 日) ルメリを支配するに至った経緯が検討されている。

第 5 章では、ムーサーによるルメリ支配の状況と、メフメトの最終的な勝利によって内訌が終結するまでの過程が考察される。スレイマン処刑後、エディルネで即位を宣言したムーサーはスレイマンの宥和政策を捨て、バヤズィト 1 世時代のような急進的拡大政策を追求した。コンスタンティノープルを包囲し、またセルビアやアルバニアを攻撃して、ルメリを直接支配下に置くことをめざしたのであった。その過程で、外部勢力だけでなく、チャンダルル家やウジ・ベイといったオスマン朝有力層をも排除していくことになった。それらにかえてムーサーは宮廷奴隷やアクンジュ、またルメリで民衆の支持を集めていたシェイフ・ベドレッディンを重用したのだという。結局、こうして排除された勢力がメフメトの側につくことになり、ムーサーは 1413 年 7 月 5 日、ソフィア近郊チャムルル Çamurlu での戦いで滅び、オスマン朝内訌はメフメトの最終的な勝利によって終結したのである。

最終章の第 6 章では、メフメトが、兄弟たちに対して取った行動をどのような方法で正当化したのかについて検討される。その手段の一つは、内訌期においてメフメトのみが用いた「スルタン」の称号であり、それは、この時期に鑄造された貨幣や、ギリシア語・イタリア語諸史料などからも確認することができるという。

続いて、オスマン朝の王位継承方法について検討される。すでにこの王朝では、君主が死ぬと一人の男子後継者がその権力を継承し、残りの王位候補者はすべて排除されるという、いわゆる「兄弟殺し」のシステムが確立していた。しかし、それまではこのシステムの限界を試すような熾烈な王位争いは起こっておらず、オスマン朝内訌期において初めて、兄弟殺しが大規模に行なわれることになったのであり、そのためにもメフメトは自己の正当性を主張する必要があったのだという。

著者はこれを踏まえて *Ahval* の記述を分析し、この年代記が、内訌期のメフメトの行動を正当化するために書かれたものであることを指摘する。*Ahval* ではしばしば、メフメトが年少であることに言及され、それはメフメトのもつ “devlet” (著者はこれを「カリスマ」と解している) によって補われていると繰り返し述べられている。これは裏を返せば、内訌期において年長の王位候補者が即位することを是認する傾向があったということである。著者は *Ahval* だけでなく、その他のオスマン朝年代記 (アシュクパシャザーデ史や無名氏のオスマン朝年代記) の記述も検討し、当時のオスマン朝社会ではまだ、正当な理由なく兄弟を殺すことは受け入れられておらず、兄弟の中で年長者 (この場合はエミール・スレイマン) が王位につき、その他の兄弟は年長者の宗主権下で封土を支配すべきというモンゴル帝国以来の考え方が強かったことを明らかにする。このため *Ahval* では、メフメトは他の兄弟と権力を分かち合うことを望んでいたが、兄弟たちが権力を独占しようとしたために戦わ

ざるを得なかった（しかも兄弟たちの死にメフメトは関与していない）という論調で、メフメトの行動が正当化されているのだと結論づける。最後に著者はこの結論を補強するため、*Ahval* とほぼ同時期にメフメトの宮廷で著されたトルコ語韻文の *Halilnâme* を取り上げる³⁾。預言者アブラハムの生涯を扱ったこの書には、メフメトとムーサーの最後の戦いに関する記述が挿入されているが、ここでも *Ahval* と同様の正当化が行なわれていることを確認するのである。

付録では、この *Halilnâme* に挿入されたチャムルルの戦いに関する部分が英訳されている。なお著者は、そこで言及される “Hacı Paşa” を、ウジ・ペイの有力者エヴレノス・ペイと同定しているが [p. 229], 実際はメフメト 1 世時代初期の宰相ハジュ・ハリル・パシャ Hacı Halil Paşa の誤りである⁴⁾。

以上が本書の概要であるが、この書における最大の特徴は、*Ahval* をオスマン朝内訌期の同時代史料として、それに高い史料価値を認め、その記述内容を、当時の状況を考慮しつつ言外の政治的意図を汲み取ることによって、解釈することに努めている点である。たとえば、前述のように第 3 章でエミール・スレイマンが飲酒にふけったり、宰相アリー・パシャが策謀をこらしたりする部分に、こうした解釈を施している。とくに第 6 章における、当時の政治文化をも浮かび上がらせる考察部分はまさに圧巻といえよう。

こうした優れた研究でありながら、しかし、史料の引用・解釈といった点で問題が見受けられるようである。たとえば、著者は第 2 章で、アンカラ会戦後のメフメトとゲルミヤン侯ヤクブとの関係について検討している。ティムールからの呼び出しを受けてアナトリア西部に向かっていたメフメトは途中で思いとどまり、アンカラ近郊から北に転じて、アルシュ Aruş という地に至った。著者によると *Ahval* には、メフメトがこの地でゲルミヤン侯ヤクブの訪問を受けたことが記されているという。さらに、この時ヤクブはメフメトに、ティムールがアクシェヒルでバヤズイトの遺体とムーサーを自分に預け、バヤズイトの遺言にしたがってメフメトのもとに届けるよう指示されたことを告げたという [p. 84]（この主張は第 6 章においても繰り返されている [p. 208]）。実際に *Ahval* の該当箇所を見ると、アルシュには「エミール・ヤクブ」がやって来てバヤズイトの死に対する哀悼の意を表し、互いに嘆き悲しんだことは記されているが、メフメトにティムールの指示を伝えたという記述は見あたらない [Oxford Anonymous: 412; Neşri-Mz: 114; Neşri-Mn: 172-173; Neşri-Ank:

3) この書に関しては、ローマ字転写による刊本が出版されている [*Halilname*]。

4) 『アマスィヤ史』を著したヒュサメッディンによると、ハジュ・ハリル・パシャは内訌終結後の 1413 年にメフメトの大宰相に任じられたが、1416 年デズメ・ムスタファとの戦いで殺され、かわってバヤズイト・パシャが大宰相になったという [Hüsameddin 1927: 190-191, 194-195]。その史料根拠は示されていないが、ハジュ・ハリル・パシャが 818 (1415/16) 年にアマスィヤ近郊のギムムッシュ Gümüş に建てたメドレセの碑板から [Ayverdi 1972: 174-175; Tüfekçioglu 2001: 128], 宰相の地位 (vezâret mesnedi) にあったことは確認できる。

422]。また、著者は何の説明も加えることなく（原文で「エミール・ヤクブ」となっていることにも触れず）、当然のごとく、この「エミール・ヤクブ」をゲルミヤン侯ヤクブと同定しているが、評者はこれにためらいを覚える。*Ahval* の他の箇所でもゲルミヤン侯ヤクブが「エミール・ヤクブ」として言及されることはないし、またこの訪問のあと「エミール・ヤクブ」はメフメト軍の指揮官 (*ser-leşker*) となってブルサに向かっているからである⁵⁾。この人物はゲルミヤン侯でなく、オスマン朝エミールの一人と解すべきではなかろうか。実際、16世紀初頭に著されたオスマン朝年代記『八天国』には、メフメトを訪れたのは「フィールーズ・パシャの息子エミール・ヤクブ」であったと記されている [*Hasht* (a): 257b; *Hasht* (b): 228a]。このヤクブはバヤズィト1世時代からアンカラの支配を任されていた人物である。ティムール朝史料ヤズディーの『勝利の書』によると、アンカラの会戦後ティムール軍がアンカラ城を包囲した際、その城主ヤクブが投降している [*Yazdi*: 415a]。このヤクブがのちにティムール軍から解放され（あるいは脱走し）、メフメトのもとに至ったのではなかろうか。*Ahval* では、「エミール・ヤクブ」がメフメトを訪問する直前の箇所で、「ゲルミヤン侯ヤクブ・ベイ」(*Germiyan-oğlu Yakub Beg*) がティムールから、バヤズィトの遺体とムーサーをアクシェヒルで託され、バヤズィトの遺言にしたがってメフメトに引き渡すよう指示を受けたことが記されている [*Oxford Anonymous*: 411-412; *Neşri-Mz*: 114; *Neşri-Mn*: 172; *Neşri-Ank*: 418]。このため著者は、そのすぐあとに登場する「エミール・ヤクブ」もゲルミヤン侯ヤクブであると思いこみ、いきおい、ヤクブがメフメトにティムールの指示を伝えたとして記してしまったのであろう。

著者は続けて、ゲルミヤン侯ヤクブ訪問の動機について検討する。ヤズディーによるとティムールは、バヤズィトがアクシェヒルで死ぬと、ブルサに埋葬されるべきであるとしてムーサーに父親の遺体とブルサの支配を認める勅状 *yarlıg* とを与え、出立させた [*Yazdi*: 427b-428a]。著者はこれと、*Ahval* に見える、ティムールがバヤズィトの遺体とムーサーをゲルミヤン侯ヤクブに預けたとする記述とに基づいて、ヤクブが、当時まだ幼かったムーサーの後見人としてブルサを支配しようとしたと考える。しかしながらブルサの住民がオスマン家に属さない者の支配を受け入れるとは思われない。このためゲルミヤン侯は、イーサーとブルサの支配権を争うメフメトと同盟を結ぼうとしたのだという [pp. 84-85]。

しかし、著者のこの見解にも疑義が生じる。著者自身、バヤズィトの遺体とムーサーを引き取らせるべき相手は当時ブルサを支配していたイーサーであったはずと考え、メフメトに引き取らせようとした *Ahval* の記述の信憑性に疑問を呈している [p. 84]。さらに言えば、バヤズィトの遺体が置かれたアクシェヒルは当時カラマン領であり⁶⁾、遺体をゲルミヤン侯

5) この点については著者も違和感を覚えたようで、「[[ゲルミヤン侯] ヤクブが軍を率いたとする我々の史料 [*Ahval*] の主張は驚くにあたらない。なぜならその軍の大部分は彼の〔軍〕であったからだ」と説明しているが [p. 87]、やはり無理があろう。

6) アンカラの会戦後、ティムールはアクシェヒルをカラマン侯に与えている [*Yazdi*: 418b]。

に託したこと自体が疑わしい。また、そもそもヤズディーの書では、ティムールがムーサーにブルサの支配権を認める勅状を与え、バヤズイトの遺体とともにブルサに送り出したことになっている。つまり *Ahval* に見える、バヤズイトの遺体とムーサーをゲルミヤン侯ヤクブの管理下にとどめ置いたという記述とは本来矛盾するものであり、この2つの史料記述は両立し得ないはずである。それにもかかわらず著者は、ヤズディーと *Ahval* の記述を組み合わせ、ティムールによってブルサの支配権が与えられたムーサーに対して、ゲルミヤン侯がその後見となったという論を展開しているのである。

これ以外の細部でも、著者による史料の引用・解釈には首をかしげる部分が少なくない。一例を挙げると、第5章で、メフメトがムーサーとの最後の決戦のためにルメリに渡った際、著者は *Ahval* に基づくとして、メフメトの宰相バヤズイト・パシャが軍を指揮してエディルネに向かったことを記すが [p.191]、同史料にはそのような記述は見当たらない [Oxford Anonymous: 431; Neşri-Mz: 138; Neşri-Mn: 207; Neşri-Ank: 506]。また、このバヤズイト・パシャをしばしば大宰相として言及している点 [pp. 34, 189, 191, 192, 199, 217] も気になる点である。たしかにこの人物はメフメト1世時代の大宰相として知られるが⁷⁾、それに先立つ内訌期においても大宰相の地位にあったことを示す史料は管見の限り存在しない。本書で史料が引用される場合にしばしば著者の思い込みや推測が混入しているようである。

また、本書では基本的な誤りが散見される。そのいくつかは本書の概要の部分で言及したが、それ以外にも、たとえばスィノプを中心としたイスフェンディヤルの領地は「ジャンク」ではなく「ジャンダル」の誤りであろうし [p.44]、バヤズイト1世がシヴァスの支配者カーディー・ブルハネッディンと戦ったクルクディリム *Kırkdilim* の戦い（あるいはチョルムルの戦い）は1392年ではなく1391年に起こっている [p.65]。また、このブルハネッディンを殺したカラ・ユリュク・オスマンはカラコユンルではなくアクコユンルの首長であった [p.66]。

こうした諸点に注意は必要であるが、それでも本書は、オスマン朝内訌期の重要性を認識し、当時の錯綜した政治情勢を、さまざまな言語で記された一次史料に基づいて明らかにしようとした労作であると評価できよう。ザカリアドゥ氏の先行研究 [Zachariadou 1983] に拠っている部分も見受けられるが、氏の研究がおもに西欧史料に依拠しているのに対し、本書はそれらに加えて、オスマン朝年代記 *Ahval* に高い史料的価値を認めて中心史料として利用した点にオリジナリティーが見いだされる。それを通じて時にはザカリアドゥ氏の見解を適切に修正し、内訌期の諸事件をより正確・詳細に説き明かしている。本書が、オスマン朝の将来にとって重要な意味を持った内訌期に関して、必読の文献であることに疑いはないであろう。

7) バヤズイト・パシャの生涯については、小山 1988 を参照のこと。

参 考 文 献

- Halilname* : Abdülvasi Çelebi, *Hâlilname*, ed. Ayhan Gültaş, Ankara, 1996.
- Hasht* (a) : Idris Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, MS. Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2199.
- Hasht* (b) : Idris Bidlîsî, *Hasht Bihisht*, MS. Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2197.
- Neşrî-Ank : Mehmed Neşrî, *Kitâb-ı Cihan-nümâ*, ed. F. R. Unat & M. A. Köymen, Ankara, 1949.
- Neşrî-Mn : *Ğihânnümâ : Die altosmanische Chronik des Mevlânâ Mehmed Neschrî II : Text des Cod. Manisa 1373*, ed. F. Taeschner, Leipzig, 1955.
- Neşrî-Mz : *Ğihânnümâ : Die altosmanische Chronik des Mevlânâ Mehmed Neschrî I : Einleitung und Text des Cod. Menzel*, ed. F. Taeschner, Leipzig, 1951.
- Oxford Anonymous : H. E. Cengiz & Y. Yücel (ed), *Rûhî Târîhi, Belgeler* 14 (18) [1989-92], 359-472.
- Yazdi : Sharaf al-Din 'Alî Yazdî, *Zafar-nâma*, ed. A. Urumbayev, Tashkent, 1972.
- Ayverdi, Ekrem Hakkı (1972) *Osmanlı Mi'mârisinde Çelebi ve II. Sultan Murad Devri, 806-855 (1403-1451)*, İstanbul.
- Hüsameddin, Hüseyin (1927) *Amasya Tarihi*, III, İstanbul.
- Kafadar, Cemal (1995) *Between Two World : The Construction of the Ottoman State*, Berkeley.
- Kastritsis, Dimitris (2007) *The Tales of Sultan Mehmed, Son of Bayezid Khan [Aḥvâl-i Sultân Mehmed bin Bâyezîd Hân]*, Harvard.
- 小山皓一郎 (1988) オスマン朝初期の大宰相職 —— バイエズイト・パシヤの昇進と失脚 —— 『榎一雄博士頌寿記念東洋史論叢』, 185-207.
- Tüfekçioğlu, Abdülhamit (2001) *Erken Dönem Osmanlı Mimarisinde Yazı*, Ankara.
- Zachariadou, Elizabeth A. (1983) Süleyman Çelebi in Rumili and the Ottoman Chronicles, *Der Islam* 60 (2), 268-290.

(桃山学院大学国際教養学部)